

## 中根環堂初代校長の教育理念と宗教教育

著者	橋本 弘道
雑誌名	鶴見大学佛教文化研究所紀要
号	19
ページ	7-21
発行年	2014-03
URL	<a href="http://doi.org/10.24791/00000005">http://doi.org/10.24791/00000005</a>



## 中根環堂初代校長の教育理念と宗教教育

鶴見大学仏教文化研究所所員 橋本 弘道

鶴見大学短期大学部保育科に所属しております橋本と申します。宜しくお願い致します。

私は本学短期大学の視点から中根環堂初代校長の教育理念と宗教教育について発表をさせていただくことになっております。

本学園の歴史を繙いていきますと、現在の附属中・高がその起源であるということになります。もともと、附属中・高は女子校だったわけですが、そこが起源となつて学園が発展してきたわけです。その歴史を遡りながら本学の教育理念と宗教教育について考えてみようと思います。ただ、そうしますと、ほとんどが附属中・高の歴史を辿ることになつてしまいます。ですから、後半、短大の教育についても触れたいとは思いますが、多くは、中・高の教育理念と宗教教育、そして、その歴史にスポットを当てるといことになると思いますので、ご了承いただければと思います。

まず、本学の建学の精神と教育理念についてですが、それを語るには、初代校長である中根環堂先生の掲げた建学の精神と教育理念について言及しなければならぬと思います。もともと本学園は、宗侶養成を目的とした学校が時代の流れと共に発展し在家教育も行うようになったという学校ではなく、純粹に在家の女子教育のために設立された学校です。私は、この点について注目したいと思っております。曹洞宗には宗門関係学校と呼ばれる学校が全国にあります。宗侶養成を起源としない学校が設立されたのは曹洞宗内では、本学園が初めてであったのではないかと思います。

設立当時は女子校でした。教育理念については、『鶴の林』という学園の機関誌に記載されているように、物質的

科学的教育・向外的客観的教育とともに精神的宗教的情操教育、内省的主観的教育を行うことを目標にしていきました。これを、中根環堂先生の言葉でわかりやすく表現すると、智者を作るよりも徳者を作る。精神力の強い実行力のあつた人格の女性を養成するということになるのだと思います。

本学園は創立九十周年を迎えようとしています。大正十三年の設立ですから、今年の三月を以てちょうど九十年ということになると思います。その歴史の流れの中で、総持学園の歴史と、教育について考えてみたいと思っております。

総持学園の起源ですが、関東大震災直後にまで遡ります。横浜市の中区大岡町にあつた光華女学校が、関東大震災で壊滅的な被害を受けてしまいます。資料には、武安氏の兄が校長とありますけれども、その武安氏から中根環堂先生に光華女学校を受け継いでくれないかという打診があつたという記録が残されています。

中根先生は、その打診を受け入れ光華女学校を受け継ぐこととなります。記録には、大正十三年四月二十一日に総持會館において開校式を行つたとあります。全校生徒十六名からの出発であつたということです。

当時の總持會館の写真が残っております。中区大岡町にあつたようです。ここを仮校舎として本学園が産声を上げたということになります。その場所は、現在の南区大岡町のあたりではないかと思ひますが、詳しいことは分かりません。生前の中根環堂先生のお姿は、様々な形で残されています。写真もそうですし、現在の附属中・高の校門を入つたところにある胸像もそうです。

中根環堂先生は、戦前は長い髭を生やしていらしたそうです。戦後は髭を剃られています。髭は中根先生のシンボルであつたわけですが、戦後、どうしてお髭をそられたのですかと卒業生が聞きましたところ、時代が変わつたから、私も変わったと答えられたということでした。

中根環堂先生は、駒澤大学の倫理学の先生でした。本学の校長職は、その職と兼任であつたようです。学園創立に際しては資金難ということもあり、ご自分の駒澤大学の給料から、先生方の給料を用立てたこともあつたようです。

その頃の教育内容ですが、二大眼目と四大標語というものがありません。昭和四年に『鶴の林』という本学の機関誌に、二大眼目として「恭儉修徳・愛敬報恩」、四大標語として「仕事の運動化、所言の實行化、天資の達成化、信念の確立化」とあります。現在の「大覚円成 報恩行持」という二大眼目になったのは、戦後だと思えます。

創立から一年後の大正十四年には、光華女学校と併設で、鶴見高等女学校が設立されます。それ以来、光華女学校は実業教育、鶴見高等女学校は高等普通教育という形で教育を行っていくことになります。

昭和五年から昭和六年にかけて、光華女学校は鶴見職業学校と名前を変え、さらに翌年、光華女学校に戻しています。これについては、どういいうきさつがあったのかわかりません。

これが、昭和十九年の日本の学校系統図です。この実業学校のところが、光華女学校にあたり、この高等女学校のところが鶴見高等女学校にあたりと考えてよいのではないかと思います。

次に校歌ですが、これは、初代学園主であった新井石禅禪師が作詞をされています。現在の附属中・高は、ほぼ当時のままの詞を校歌として継承しています。戦前は三番の歌詞の一部を「弥栄えゆく大御國」と歌っていたようですが、戦後は「弥栄えゆく民主國」と変わっています。

次の写真ですが、これが昭和十年頃の校舎です。上から見るとこういう形ですね。ちょうど鶴見が丘の一番高い場所に建てられていることがわかります。現在も附属中・高はこの場所にあります。

昭和十二年には、光華女学校を鶴見第一女学校と名称変更しています。

この写真は、道守地蔵尊です。現在でも附属中・高の校門を入った左脇にいらっしやいます。昭和十四年に当時の生徒であった久喜登喜子さんが、踏切事故で亡くなりました。そこで、生徒たちが募金を集めて、久喜さんの供養のために建てたのが、この道守地蔵尊だと伝えられています。二代目の校長先生をなさった三沢智雄先生の残された道守地蔵尊縁起という文章にその詳細が書かれています。道守地蔵尊は、現在も生徒の登下校を見守って下さっています。

続いて、昭和十八年ですが、校舎が、講堂を除いてすべて焼失してしまいます。ここに講堂があるんですが、この講堂以外、全部消失してしまいました。金庫が焼け跡に残っています。校舎が焼失したのは、ちょうど、戦争中のことですが、震災ではなくて、火の不始末であったそうです。

この間、昭和十八年から二十一年にかけて、『鶴の林』は休刊になっていますので、この間にどんなことがあったかということについては、詳細を知ることができません。

昭和十九年に学園は、財団法人総持学園となり、鶴見第一女学校から鶴見女子実業学校へ校名変更、そして、さらに、昭和二十二年には鶴見第一女学校と校名を戻し、鶴見女子中学校を併設します。

その頃の資料を見えますと、二大眼目が大覚円成、報恩行持になっています。また、八大綱領というものもあつたようです。

昭和二十五年には、坂本学園興国中学・高等学校という男子校の経営を継承しています。ここに示してある鶴見学園中学・高等学校は、坂本学園興国中学・高等学校から校名を変更して、本学が経営していたことを示しています。ですから、鶴見学園高等学校、鶴見学園中学校は男子校であつたということになります。すぐに廃校になってしまうのですが、その校地は、鶴見女子中学・高等学校のグラウンドとしてしばらく使用されてきました。そして、短大校舎建築のために、一部、横浜市に校地を売却することになります。

これが当時の募集要項です。鶴見女子高等学校、鶴見女子中学校、鶴見学園高等学校、鶴見学園中学校、そして、鶴見女子成人学校、それぞれで入学者の募集を行っています。

今の地図を重ね合わせますと、ちょうどこの部分ですね、これが鶴見学園中学・高等学校があつた場所です。現在はここに、女子寮があつて、教職員の宿舎もあります。当時はこの部分も含めて本学の土地だつたということです。この半分を横浜市に売却して、その資金で短期大学の校舎を建築しました。売却をした場所が、現在、寺尾小学校になっています。

す。残った土地に学生寮が建設されて現在に至っています。現在では、附属中・高の手を離れて、大学が管理しています。昭和二十四年には、赤い羽根共同募金で全国一位の募金を集めて、表彰されています。これについては、三沢智雄先生が書かれた鶴見の職員会議と断食写経会という文章にその詳細が書かれています。これも教育理念である報恩行持の実践活動の一環として行われていたのだと思います。

当時は、学園内でも募金活動等、報恩活動が盛んであったという資料が残っています。現在は昔ほど盛んであるとはいえないかもしれませんが、報恩日といって生徒会が募金を呼びかける日が設けられています。このようなことから報恩行持という教育理念に沿った教育が実践されていたということがいえるのではないかと思います。

次ですが、昭和二十六年に、財団法人総持学園から学校法人総持学園となります。

これがちょうど昭和二十六年の和光館落成の時の写真です。昭和十八年の校舎焼失後、校舎の建築も進んでいきます。そして、いよいよ、昭和二十八年、創立三十周年記念事業として、鶴見女子短期大学設立認可を得て、国文学科が設立されます。そして、昭和三十一年に鶴見女子短期大学幼稚園教員養成所と、三松幼稚園が設置されます。

その時に中根環堂先生が、本学の特色という文章を書いておられます。そこには、「本学園は男女共学を理想とはしますが」とあります。当時、総持学園は、女子校として有名だったわけですが、それは当時の時代の状況に合わせてそうしているのだということです。本学園は男女共学を理想とするので、将来的にはそちらに向かっていくということを示されたと解釈できます。

続きまして、昭和三十四年ですが、創立三十五周年記念講演として、ノーベル賞を受賞された湯川秀樹先生をお迎えています。講演の題名は「科学文明の行方」です。当日、中根先生は、非常に体調が悪かったようです。午前中湯川先生をお迎えする前に「温故知新」という書をお書きになられて、その後、湯川先生が来られたということで、お出迎えに出られたようです。そのときの写真がこちらです。

湯川先生の講演の前に、壇上で湯川先生の業績や、講演依頼のときの状況などを紹介され、その後、御自分の席に戻られて、そのまま、うな垂れられました。周辺に座っていた教員が気付いて、そのまま保健室に運ばれたようです。このボタンを押すと、中根先生の最期の肉声が聞けるようになっていますが、時間の関係で省略させていただきます。もし、最後に時間が余れば、お聞かせしたいと思います。結局、「温故知新」という書が絶筆になりました。その絶筆は、現在でも附属中・高の講堂に設置してあります。

中根環堂先生は、八十四歳で亡くなられます。中根先生は毎年お正月に遺言状を書いておられたそうです。それで、亡くなられた後で、遺言状を開封すると、学園は、三澤智雄先生に任せたいと書いてあったそうです。

三澤智雄先生の略歴を示しておきます。当時、長野県茅野市の頼岳寺の住職になられていたところを本学の教員がそちらまで伺って、就任していただけるように懇願したようです。最初はなかなか引き受けると言ってくださらなかったそうです。何度もお願いして、是非、中根環堂先生の遺言にも、そのようにありますので、ぜひぜひ次の学園長にご就任くださいとお願いをしたようです。なかなか受けて下さらないので、派遣された教員が、状況を学園に連絡すると、受けてもらえるまで帰ってくるなど言われたということです。とにかく何度もお願いをして、やっと二代目の学園長になっていただいたそうです。

二代目である三澤智雄学園長のご尽力で、鶴見女子大学が設立されます。資金約六千万円のうち、五千万円を中・高の特別会計より捻出したそうです。創立六十周年記念誌にそれについての文章が残っています。当時、中・高の教員の給与は、県教員の男性は三分の一、女性は半分だったということです。そうやって捻出した資金によって大学は設立されました。

例えば、退職金の一部を高校に寄附したいという教員がいらつしやると、三澤先生は、有り難くいただいて大学設立のために使わせていただきますとおっしゃったそうです。高校に寄附したいと申し上げたのに何故に大学の設立に

お使いになられるのかと、その先生は相当ご不満だったようですが、そうやって大変苦勞しながら大学設立を成し遂げたということです。

当時、三澤先生は、中・高は長女で立派に育っているけれども、大学は次女で生まれたばかりなので、次女に今は力を注いでいるけれども、決して長女である中・高のことを忘れてはいるわけではないとおっしゃっていました。

そして、昭和三十八年、創立四十周年記念、二祖国師峨山紹碩禪師六百回大遠忌に鶴見女子大学が設立されます。

三澤先生には、色々と大学設立に際して、中・高と大学との間に確執が生まれまいようにと、ご心勞があたりだったようです。三澤先生の大学設立のための心勞は、想像を絶したものであったと思われます。そして、大学を設立された後、二代目学園長就任から九年でお亡くなりになります。

三澤先生が体調を崩されて入院されているときに、中・高の先生方がお見舞いに行かれたのですが、「私が死んだなら…こんな石を…学園の片隅に置いてくれ…それにこう刻むのだ…弥勒菩薩の下生を待つ…まことの智慧にめざめて空に徹し、小さな自我を捨てて生きとし生けるもの、あらゆる物、自分の仕事に対しても深い愛情を持って努力していけるような子供たちを是非育ててほしい」と仰ったそうです。

「物心両面に完備する真の文化が地上に創りだされる」ことを祈られたということだと思います。これが、三澤先生の打ち出された本学園の教育理念であり、誓願であったと言えるのかもしれませんが。

その際に、紙に書かれた「弥勒菩薩の下生を待つ」という直筆の文字が転写されて、弥勒菩薩の像と一緒に、今も附属中・高の前庭に残っています。

その後、昭和四十五年に歯学部が設立されます。そして、昭和四十六年に鶴見女子短期大学が鶴見女子大学短期大学部に名称を変え、昭和四十七年に鶴見女子大学が鶴見大学と今の名前に変わっていきます。

初代校長中根環堂先生の教育方針は、「鶴見女子の教育理念とその根本方針」、「本校特色の真教育」という題名で「鶴



の林」のバックナンバーに残っています。それを、抜き刷りしたものがこの会場の後ろに展示してあります。ぜひご覧ください。

次は、宗教教育の確立についてです。

教育のキーワードとしては、

- ・教育の根本は人物を作ることである。
- ・随所に主となる。
- ・行の教育、一日なさざれば一日食らはず。
- ・仕事の聖行化。

などが、挙げられます。さらに、教育理念についての詳細については、『鶴の林』の中に様々な形で文章が残っています。本自体は、かなり傷んできていますので、このような資料はこれからしっかりと保存していかなければならないのではないかと思います。現在でも、附属中・高の図書館に行けば、『鶴の林』のバックナンバーは閲覧することができません。

次は、私立学校ならではの独自の呼称と文化についてです。

附属中・高では、私立学校ならではの特色のある名前が校舎、クラス名につけられています。たとえば、校舎は、今は新しい校舎が立てられましたので、この呼び方で呼ばれてはいませんが、かつては、光照館・浄光館・精進館・慈眼館・発心館・道光館などと呼ばれていました。クラス名は、英・孝・仁・敬・貞・正・恭・愛・礼・和・信・恩・明・徳・円・修・順・律という名前が用いられています。クラスの委員も、学級委員長や副委員長のことを、以前は、級監・副級監と呼んでいました。

生徒会は、戦前は蕙風会という名前で呼んでいたようです。今はそのまま生徒会という名前になっています。蕙風会は、

民主的に生徒の意見を色々と出しながら運営されていたようです。そして、PTAは、双輪会という名前で呼んでいます。これが、新築された現在の校舎の前の校舎です。今は、全部取り壊されまして、ここに新しい校舎が建っています。現在は教科教育型の教室配置を取り入れています。

こちらは体育館です。創立五十周年記念として建設されました。そして、講堂は、創立六十周年記念で建設されました。周年記念事業として、体育館、講堂をそれぞれ建設したということです。

新校舎については、特に周年記念事業として建てられたわけではありませんが、後の方たちが歴史を垣間見た時に本学の発展過程がわかりやすいように、創立八十五周年記念校舎として歴史に刻んだらどうかと思います。そうすると、ちょうど中根環堂先生の没後五十年、創立八十五周年に当たる年に新校舎が建てられたという位置づけになります。

次に、宗教教育・建学の精神を顕現するものですが、先ほど申し上げたような、こういう標語が学園の教育方針として打ち立てられていました。そして、それを全訓という形で中根先生自らが生徒たちに講義されました。

時間が迫ってきましたので、どんどん行きたいと思います。

附属高校で毎朝行われている朝礼の内容についてです。

まず、朝礼は黙然から入ります。椅子に座った坐禅だと思っただければよいと思います。朝礼が始まって3分程度黙然し、その後、聖歌を読んで、読経し、「大覚円成、報恩行持」と七回唱え、さらに黙然をして、終礼で終わります。一学期は般若心経、二学期は観音経、三学期は修証義を唱えました。現在では、朝礼のやり方もずいぶん簡素になっています。

附属中・高が女子校で、さらに中根先生が学園長をされていた頃は、いきなり入学式で読経などをすると新入生が驚くといけないということで、仏壇を締めて入学式を行っていたようです。こちらが旧講堂での朝礼の様子です。

次にモロカイ観音です。現在の附属中・高の新校舎の中に設置されています。この観音様の縁起については、三澤

智雄先生がモロカイ観音縁起という文章に、その由来を残されています。このモロカイ観音は、ハワイのハンセン病患者のためにモロカイ島に本学が寄贈したものです。それが、数十年の歳月を経てそのお役目を終え戻ってこられました。

次に、宗教行事ですけれども、さまざまな宗教行事がございます。これは、主に中・高で行われている宗教行事を記載したものです。

これは、初代学園長である中根環堂先生と三澤智雄先生の写真です。初代学園長の中根環堂先生は、中・高・短大・幼稚園を設立され、そして、二代目学園長の三澤智雄先生が大学を設立されました。そういう意味では、本学園における教学の両祖が、中根先生、三澤先生であったと言えるのではないかと思います。中根環堂先生・三澤智雄先生のご尽力で、今の学園の教育の礎が築かれたということだと思います。

八十周年から九十周年にかけて、本学園の源泉である附属中・高は、女子校から男女共学校へと大きな変化を遂げます。附属中・高の八代目にあたる校長先生は、本学園始まって以来の女性の校長先生でした。伊藤克子先生ですが、伊藤先生が在任中に女子校から男女共学校へ変わります。もともと、本学は、瑩山禅師の誓願であった女人救済を建学の精神とし、女性の自覚と向上を目標に教育を行ってきました。そして、時を経て、その学園が女性の校長を輩出し、その女性の校長が附属中・高を男女共学へと導いたということになります。この出来事は、女性の自覚と向上を目指してきた本学にとって、非常に象徴的な出来事であったと思います。女子教育に特化した教育は、女性の校長を擁立することで、社会的な役割としての一つの到達目標を達成し、新たな発展に向かって動き出したと言えるのではないかと思います。そして、在家教育を含めて宗侶養成も行うことになりました。また、教科教育型の校舎の新築も行われました。さらに、今までは中・高と大学は併設という位置づけであったわけですが、中・高は大学の附属ということになり、組織編成上も大きく舵が切られました。

ここまで来て、やっと短大の教育理念の話にたどり着きます。

ここでは、短期大学部、特に私が所属しております保育科のお話をさせていただきますと思います。

全学的に入学してすぐの五月に一泊参禅会を行なっています。保育科もこの時期に本山に一泊して参禅体験をすることになっています。

また、教科として前期は宗教学、後期は仏教保育という授業が必修で設定されています。保育科の宗教学の授業では、世界を宗教という視点で概観します。宗教は、人間が生活していく上での価値基盤を指し示すものですが、学生にはそういう観点は希薄です。例えば、子どもを教育していく場合も宗教的な考え方が基盤となるのが世界のスタンダードであると言えるのではないかと思うのですが、学生はそういう視点で宗教について考えることはありません。したがって、宗教を視点に据えると、世界はどう見えるのかということを経験のテーマにしています。その中から相対的に日本人の宗教観というものを探っていきます。それが、日本人の子育て観を考える上での重要な基盤になるという考え方をしています。

これは授業で見せているグラフですが、キリスト教徒とイスラム教徒を合わせると世界の人口の52%程度になります。グラフからもわかるように、これだけの人達がなんらかの宗教を信仰しています。我々日本人が仏教徒に組み込まれているかはわかりませんが、仏教徒は6%。ヒンズー教はインドの民族宗教であると言っていると思います。13%程度。無信教が12%です。無信教はたったの12%なのです。それ以外の、宗教を信仰している人達と我々との交流は、やはりそれぞれの宗教を理解していくことで深まっていくのではないかと思います。

次ですが、日本人の宗教観は、日本人の文化や価値観のあり方を反映しているのではないかと思います。そして、意識をしていなくても、やはり日本人の価値観の根底にある意味での宗教観が支えているところがあるのではないかと思えます。それらの相互関係が結果的に日本人の子育て観にも影響を与えているはずだと思っています。

仏教保育につきましては、「いのちを大切にしましょう」という「おしゃかさま」の教えを子どもたちのところに

育て、じぶんの「いのち」も、自分以外の「いのち」も大切に育てていく保育が仏教保育であるという定義をしています。この定義は、私の前任である佐藤達全先生から受け継いだものです。

仏教保育のテーマは「いのち」です。これは、保育の五領域と呼ばれているものです。「健康」「環境」「人間関係」「表現」「言葉」です。これをもう少し詳しく掘り下げてみると、「健康」は身体的にも精神的にも健やかであることが大切であることとなります。「環境」では、周囲の環境に関心をもって、しっかりとコミュニケーションをとれることが大切。「人間関係」では思いやりを大切にして、他人と上手にかかわることが大切。「表現」では、考えることや感じたことを素直に表に出して、感性や想像力を高めることが大切。「言葉」は、自らの言葉で相手に気持ちを伝え、自分も相手の話を受け入れるということが大切。ということになります。

仏教保育では、その根本に仏教保育を位置づけて、ここから、保育の五領域を考えていきます。そういう理念の下で保育科の仏教保育の授業は展開しています。日本人の思想的伝統、そして、日本人の伝統的子育て観が保育者の保育観に影響を及ぼしていくであろうことを意識しながら授業を展開しているということです。

ここでは、本学の教育理念である「大覚円成 報恩行持」について考えてみたいと思います。この言葉は、人それぞれの解釈があつていいのではないかと思います。

例えば、「大覚円成」については、人生上の目標の成就を目指すというところで捉えていくことが可能であると思います。そして、「報恩行持」は、その人生上の目標の成就が、社会貢献につながっていかなければならないということを示していると考えられることもできます。

我々は、資本主義社会の中に生きています。この世界はある意味で損得勘定の世界であると言えるかもしれません。しかし、人生上の目標や使命感、誓願というのは、損得勘定を超えたところにあるもので、その成就を目指すためには、精神的な、ある意味では宗教的な信念というものがあつてくるのではないかと思います。それが、中根環

堂先生がおっしゃっている「宗教的信念を持った人間を育てたい」という言葉につながっていくのだと思うわけです。現代の日本人に聞きますと、信仰を持っていませんと答える人が70%近くいるそうです。もしそうであるならば、「宗教的信念」と言われても違和感を持つ人のほうが多いのかもしれないですね。

一方で近年では、ヒューマニズムの宗教ということが言われています。例えば、デューイが言っているように、「一人ひとりの人間が心の中で社会的・人類的な理想に目覚めて生きることこそ宗教的なこと」であるとか、フロムが言っているように、「人間がなんらかの目的に向かって自己を捧げながら真摯に生きる」とき、その生き方は宗教的である」という言葉については、そんなに違和感を持たないのではないのでしょうか。この言葉を前提にして中根環堂先生の「宗教的信念を持った人間を育てたい」という言葉を考えてみると、中根先生が言いたかったことの本当の意味がわかるのではないかと思います。

次ですが、こちらは、三松幼稚園の様々な宗教的な活動・教育です。時間が迫ってきましたので、こちらにつきましては、配付資料をご覧くださいだけだと思います。

その次ですが、本学は創立九十周年を迎えようとしています。中根先生は、「教育は国家百年の大計」であると常々おっしゃっていたようですが、学園の創立百周年も間近であると言えます。

今後の学園の課題としては、建学の精神の現在化がその一つとして挙げられると思います。中根先生も時代の要請に合わせて、世の中のためになるように学園の形も変わっていかねばならないという意味のことを述べられています。その意味では、建学の精神を現在の言葉に置き換えて具体的に発信していくことは重要なことであると思います。それについては、木村学長先生の先ほどのお話に繋がることであると思います。

次に、建学の精神の日常化ですが、日常の学園生活の中で、教職員や学生、生徒、園児が意識的、無意識的にかかわらず、その精神を体現してこそ、建学の精神は浸透していると言えるのではないかと思います。

これから、創立百周年へ向けて、今まで以上に未来を生き抜く強靱な精神を持った人材を育成していく決意を持たなければならぬのだと思います。これは、中根環堂先生の願いでもあったのだと思います。どんなに辛いことがあってもそれに負けることなく、一生懸命生き抜いていく、そういう人間を育てていきたいと中根先生はおっしゃっています。また、今の時代は、一人ひとりの創造性が問われている時代であると言えるのではないかと思います。最近では、このような本も発行されています。ここには「モチベーション3.0」とあります。この3.0という数字は、パソコンソフトなどのバージョンを示す数字と同じであると捉えていただければわかりやすいのではないかと思います。3.0ということは、1.0や2.0があつて3.0があるという意味です。ですから、モチベーション3.0は、人間のモチベーションが第三の段階にあるべき時期にきているということを表しているのだと思います。

これは今後、求められている人材と、その人材が置かれるべき環境について言及しているのだと考えることができます。人間が生きていく上でのモチベーション、すなわち、動機ですが、最初の段階は、モチベーション1.0と言われる段階、生存を目的とするモチベーションの段階です。モチベーション2.0は、アメとムチ、すなわち、信賞必罰に基づく、与えられた動機づけによるモチベーションの段階です。モチベーション3.0は、自分の内面から湧き出る「やる気」に基づくモチベーションの段階です。そして、このモチベーション3.0というモチベーションが今後最も重要になるモチベーションのあり方だということですが、さまざまなイノベーションは、このモチベーション3.0を生じさせる環境から生まれてくるということです。

我々もそういう人材を生み出す環境を整備していくことが創立百周年に向けての目標になっていくのではないかと思います。

次ですが、本学は、周年記念事業によって学園を発展させていったという歴史がございます。創立三十周年記念事業として、鶴見女子短期大学を設立し、創立四十周年記念として、鶴見女子大学を設立し、そして、創立五十周年記



念として、こちらは、中・高だけのことになりますが、体育館を建築し、そして、六十周年記念として、講堂を建築してきました。

来年、創立九十周年になりますが、学園創立百周年に向けて、「不易流行の精神」、すなわち変えるべき所は変え、変えてはいけない部分を変えずに、中根先生・三澤先生両先生の目指した物心両面の充実した社会の実現を目指し、まことの智慧と慈悲を兼ね備えた人間を世の中に送り出していかなければならないのではないかと思います。

そうはいっても、現実はなかなか厳しく、うまくいかないことが多いわけですが、それでも、そういう努力を日々続けていくことが、我々の役割なのではないかと思っております。

以上で私からの発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【付記】 本稿は、口頭の発表をもとにして作成したものである。ただし、口頭の発表内容だけでは把握しづらい部分については、発言の意図が明確になるように加筆を行っている。